
光が満ちるこの世界で

雨と傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光が満ちるこの世界で

【Nコード】

N2796W

【作者名】

雨と傘

【あらすじ】

始まりは突然だった。光に包まれて異世界に落とされた私達。そこは光を狂信し、闇が迫害される世界だった。魔法や魔物、亜人族と呼ばれる者が存在する異世界。大切なものを奪われた主人公がもう二度と奪われないために、力を求めていく物語。

プロローグ 眠り姫は笑わない（前書き）

初のシリーズ・復讐をテーマにした小説。
どうなるかドキドキ。
とりあえず、ほのぼのからは遠ざける予定。

ブローグ 眠り姫は笑わない

開け放たれは窓からは心地いい風と優しい光が入ってくる。
白いレースのカーテンがふわりゆらりと揺れるている。

その奥にはベッドに横たわる美しい少女。

私の大切な幼馴染。

短かった栗色の髪は長くなった。

だけど顔つきは、変わらない。

…それは、私も同じか。

あれからもう5年。

あつという間の5年間。

時が止まった5年間。

白い手を握り締める。

「やっと、この時が来たよ。」

冷たい。だけど、とくり、とくりと命の音がする。

「もうすぐだよ、もうすぐあいつらに、あの女に復讐することができ。」

ねえ、ずっと眠り続けている君。

どんな風に呼ばれているか知ってる？

”眠り姫”だって。

そのまんまだよね。

ちよっと笑えない？

「今夜ね、出陣なんだ。
皆、準備に追われているんだよ。」

ねえ、笑ってよ。

目を覚まして、微笑んで。

君の笑顔が見れなくなつて3年だよ。

「次、ここに来れたとしても、私の手は汚れてしまっているんだろ
うね。」

こうして、君の手を握れるのは最後かもしれない。

「だけど、ただ私の手が汚れてしまったとしても、また君と笑え
たら。」

叶わない願いだろうけど。

叶つてはいけない願いだけど。

もし叶ったら、それはとても幸せな事。

君の笑顔は優しくて、泣きそうになるんだろうな。

それで君はなんて言うんだろう。

きっとそれは君らしい言葉。

君の手を握り締めていると、足音が聞こえてきた。

耳を澄まして気配を探る。

足音。一人。男。鍛えられている。敵意は無い。

…仲間、か。

緊張していた体と心を緩ませる。

君が眠っている間にこんな事も出来るようになったんだよ。

「リン様。総司令が呼びです。」

「…今行く。」

握っていた手を解放する。
名残惜しいけど。

「行ってくるね、”小夜”。」

背を向けて歩き出す。

凜香ちゃん。

記憶の中で小夜が私の名前を呼ぶ。
笑いながら、嬉しそうに。
楽しそうに私の名前を呼ぶ。
懐かしくって泣きそうになる。

私は小夜の笑顔が好き。

太陽のように眩しい笑顔ではないけど。

優しくて安心するような笑顔。

だから、それを奪ったあいつらが許せない。
許さない。

扉の閉まる音が部屋に響く。

一筋の涙が溢れた。

眠り姫は微睡まどろみの中、必死に名前を叫びます。
ただ願いは届きません。
だって眠り姫は眠っていて声を出せないからです。
何も出来ない眠り姫。
魔女の呪いはいつ解ける？
それは誰にも分からない。

ブローグ 眠り姫は笑わない（後書き）

各話タイトルと最後の詩っぱいのは、童話を意識して。

私の中では、童話＝ファンタジーと思っている所があつて、入れてみました。

各話タイトルを考えるのがめんどかった…とも言つかもしれない。べ、別に考えるのが面倒だったとかじゃないんだからねっ。（ツンデレ風に）

お粗末さまでした。

第1話 物語の始まり

「駅前にね、クレープ屋さんが出来たんだよ!」

幸せそうな笑顔で小夜が言う。

絶対頭の中は甘いもので埋め尽くされているのだろう。
目がキラキラとしている。

日本人にしては色素の薄い、栗色のふわふわとした髪は肩よりも短い。

偶にハーフとかに間違われるけど、純粋な日本人だ。
紺色の制服に赤いリボン。

「それじゃあ、明日にでも行こうか。」

「うん、そうだね。」

「頼むのは?」

「いちごチョコクレープとバニラアイスバナナ!」

「うつわ、甘そう。しかも二つも頼むの。」

「もちろん! 3つ目もいけるよ。」

甘党の小夜は新しい店が出来ると私を誘う。

私は甘いものはあまり好きではないけど、いつも一緒に行く。
小夜の食べっぷりが面白いんだよね。

それに大切な幼馴染の頼みだ。断る理由もない。

「凜香は抹茶あずき？」

「んー、そうだね。」

「一口頂戴ね。」

「はいはい。」

いつもの帰り道。

いつもの話題。

いつもの日常。

それが”いつも”ではなくなったのは、小夜の足元に光る模様が現れたから。

それは小夜の足元から広がるように図を描いていく。

「小夜、なにか踏んだ？」

ぽやぽやとしている小夜の事だから変なものでも踏んだのかと思った。

「うーん、なにも踏んでないと思うけど。」

「とりあえず、そこから退いたら？」

「うん。」

だけど、光は小夜に着いていく。足元から離れない。
なんだ、これは。

「り、凜香ちゃん。」

小夜の声が震える。
目は涙で潤んでいる。

「小夜、こっちに来な！」

「あ、足が動かないよ。」

嫌な予感がした。

光が強くなっていく。
光に包まれていく。

やばい、小夜を守らなくては。

「小夜！」

小夜を抱きしめる。

光が爆発する。

光が消えた後には何も残っていなかった。
そして私達は世界から消えた。

暗い暗い世界の中、君を抱きしめながら、誰かの声を聞いた。
守れ、と。何度も何度も。
呪いのように。

第2話 舞踏会に呼ばれたシンデレラ

どれくらい光に包まれていたのだろう。
私達は広い部屋の中にいた。

周りには煌びやかな服装の男達がいる。
男というよりはじいさん達？

若いのも混じってるけど。

…じいさん達でいいや。めんどいし。

「なんと、3人も…。」

「神が我らに…………たを…………。」

「光の…………しか…黒…。」

何を、話しているんだ。

頭が痛くて聞き取りにくい。

大理石で出来ている部屋。

いや、もはや空間と言っていいほど広い。

見覚えが無い。

「こ、こは…?」

「凜香ちゃん、い、息が、息ができまふえん!」

「あ、ごめん。」

強く抱き締めすぎたみたいだ。
力を緩めれば、ぷはっと顔を上げる。

顔が赤い。

うん、ごめん。

背中をさすって落ち着かせる。

「ちょっとお、ここどこなのっ！」

声の方を見れば、クリーム色の制服を着た金髪の女の子がそこにいた。

そういえば、その髭が3人とかなんとか言っていたような。

「凜香ちゃん、「うっど」…？」

「分からない。」

金髪少女は相変わらず喚いている。

うるさいのは嫌いだけど、ここがどこだか知りたいのは私も同じなので黙っておく。

あ、頭痛いの治った。

「道を開ける。」

低い声が命令する。

人が避けて道を作り、頭いづくを垂れていく。

「へえ、3人も召還されたのか。
げ、黒もいやがるじゃねえか。」

うつわ、美形が出てきた。

金髪に青い目。

高圧的な物言いだ、声がいい。

あれだ、腰にくるような声。

それに、黒って私の事か？

「ちょっと、あんた誰？」

金髪少女がそう言うけど、顔が赤くなっている。

「俺か？おーさまだよ、おーさま。」

おーさま…^{おー}O様？

舞踏会に招待された3人のシンデレラ。

でも本物は1人だけ。

偽物はだーれ？

第3話 白い小石を目印に

現在私達は周りを甲冑を着て剣を持った騎士っぽい男達に囲まれながら歩いていきます。

前は自称王様が歩いていて、後ろには周りにいたじいさん達がついてきています。

小夜が恐がって腕にひつついてくる。
歩きにくい。

あの金髪少女は王様にひつついて話しかけている。
よく話しかけられるな。

あの金髪美形は王様：らしい。
しかも本物の”神子”か調べるため、聖域に行くのだそうだと、現在に至る。

おいおい、ちょっと待て。
どういう事だ。

あれか、壮大なドツキリなのか。
よくこんな大きい城借りれたな。

あれこれ10分ぐらい歩いているけど目的地に着かないぞ。
しかも騎士っぽい男達も本物っぽいし。

あと周りから睨まれているような気がするんだが。

死線じゃなかった視線が痛い。

あははははー。…笑えねーよ。

「ここだ。」

ああ、やっと着いた。

目の前にはでっかい扉がある。
しかも金色。趣味悪。

自称王様の両側に控えていた騎士二（っぱいのはめんどいから略）
が扉を開ける。

扉の向こうにあったのは

「うわぁ、綺麗…。」

小夜が感嘆の声を上げる。

私も声には出さなかったけど、同じ気持ちだった。

綺麗な青の水が泉のように満ちていて、中央には透明な石がある。
石は泉から突き出ているように見える。

あの石：水晶？結構大きいな。石柱って言ったほうがしっくりくる。
光が反射していて七色に光っている。

上は高いけど完全な天井なのに、光が降り注いでいる。

という仕組みだ。

石柱に続くように一本の道がある。

一人だけ通れる位の道幅だ。

ぞろぞろと部屋といていいのに入っていく。

「ここが聖域だ。」

ここが…？

そう言われて納得する自分がいる。

「超きれいじゃん、ここおっ！」

金髪少女、感動の邪魔をするな。

「ああ、美しいだろう？光の女神が守護をする場所だ。美しくないはずがない。」

光の女神？なんじゃそら。

「おい、その女。あの石に触ってこい。」

「私があ？」

あ、金髪少女が指名された。

「そうだ。さっさと行け。」

俺様だな。

渋々といった感じで石に触りに行く。
石柱に触った瞬間

金色に輝いた。

「なっ。」

思わず声を出してしまった。

一瞬で金色に。どうなっているんだ。

小夜も驚いたのか、腕を掴む力を強くした。

「おおおおっ！光だ！」

「光の神子様。」

「ああ、なんと神々しい…。」

光？神子？神々しい？

じいさん達のテンションが上がっている。

「お前が光の神子なのだな。」

戻ってきた金髪少女を自称王様が迎える。

「光に愛された子よ、俺がお前を守ろう。」

そういうと、手を取り手の甲こにキスをした。
うげえ。

「なっ、いきなりなにすんのよっ！」

そう言っつて、手を引つ込めるが満更でもないようだ。
だつて軽く笑つてる。

「この者達はどういたしますか。」

目の前で起きた事に引いていると、いつのまにか騎士に囲まれている。
た。

…全く心配がなかった。

「凜香ちゃん…。」

怯える小夜を背中に庇う。

神子様が分かったから私達は用無しって事？

冗談じゃねえよ。

「いや、そいつらも調べておこつ。」

もしかしたら神子を守るために女神が遣わした騎士かもしれない
しな。」

は？その金髪少女を守るための？

ありえねえ。

たとえそうだとしても守りたくなんてねえよ。

とりあえず、あの石柱に触る事は避けられないみたいだ。

さっきまで金色に輝いていたのに、透明に戻っている。

本当にどんな仕組みになってるんだよ。

ある所にヘンゼルとグレーテルという仲の良いきょうだいがいまし
た。

ヘンゼルとグレーテルは菓子のお城へ連れ去られてしまいました。

白い小石の道標^{みちしるべ}は見つかりません。

2人は途方に暮れました。

第4話 海に消える人魚姫

小夜が、あの石柱に向かって歩いていく。

くっそ、この俺様王様野郎。

なんで黒とか何とか言って、私を先に行かせないんだよ。

あんなに震えてるじゃねえか。

おい、金髪少女。俺様王様野郎にひっついてんじゃねえよ。

王様も「ういやつ」的な顔をしてんじゃねえよ、こっちは背中がぞわぞわするんだよ。

小夜は石柱の前に辿り着く。

手が、震えてる。

だけど、意を決したように石柱に手を伸ばす。

こっちから顔が見えないけど、きっと覚悟したような顔をしているんだろうな。

あの子はそういう子だ。

石柱に触れる。

透明だった色は、漆黒に変わった。

綺麗な、色。

暗いのに光っているように見える。

まるで、満開の星が瞬く夜空みたいだ。

空気がざわめくを感じた。

「黒だっ!」

「闇だ、なんと不吉な。」

なにこの反応。

ぞわりと悪意が迫るのを感じた。

スツと、王様が小夜を指差す。

「殺せ。」

傍に控えていた騎士の一人が駆けていく。
手には剣が握られている。

ねえ、待つてよ。何をする気だ。

剣が小夜を斬った。

バツサリと、悲鳴もなく。

小夜の体が傾いでいく。

剣からは血が滴り落ちている。

ぱしゃり、と水飛沫を上げて沈んでいった。
全てがスローモーションに見えた。

「あ…さ、よ…？」

茫然と名前を呼ぶ。

小夜を斬った騎士が戻ってくる。
血が付いてる。誰の…小夜の？

「やだ、気持ち悪い。」

金髪少女がそう言う。

「ああ、穢れたものを見せてしまったな。
よくやった、我が騎士よ。褒美をやるう。」

俺様王様野郎が言う。

「ああ、穢れが聖域に。」

「だが光の女神がすぐ浄化を。」

「いや、神子様が浄化をしてくださるだろう。」

じいさん達が口々にそう言う。

あんた等、何言ってるの？

小夜は上がってこない。

助けなきや、あの子は泳げないから溺れているのかもしれない。

プールとか海に行くとか絶対浮き輪を離さなくて、浮き輪ごと引つ張ると楽しそうに笑ってた。

水色と白の縞模様の浮き輪。あの子のお気に入り。

そくだよ、今あの子浮き輪を持ってない。

「っ、小夜！」

道を駆けていく。

助けなきや、私があの子を助けなきや。

小夜が落ちた場所から飛び込む。

冷たい水。

両手をこっちに伸ばしながら沈んでいつている。

力なく、傷口から血を流しながら。

必死に潜っていく。

っ、どんだけ深いんだここ！

底の见えない水の中、小夜の手に触れた。
体を引き寄せ、傷を手で押さえる。

血が止まらない。

早く、出ないと。

そのまま水上を目指して泳ぐ。

こぼり、と泡が口から逃げていく。

息が続かない。

苦しい、霞む、思考が意識が。

あと、もう少しなんだ。

もう少しで出られるんだ。

ゴポリ、と最後の泡が天に向かっていく。

冷たい水が肺に流れてくる。

最後の力を振り絞って、天に向かって手を伸ばす。

光がゆらゆらと水面で揺れている。

お願い。せめて、小夜だけでも、誰か、たすけ……

霞んでいく意識の中、伸ばした手に暖かいなにかが触れた気がした。

水へと落ちていった人魚姫。

助けに来た仲間の願いも空しく、泡となって消えてしまいました。

泡は天に向かっていきます。

後に残るのは蒼く冷たい世界だけ。

第5話 小人と獵師

あれから、三ヶ月が過ぎた。

私達は龔爺：じゃなかったハウエルと名前のじいさんに世話になっている。

目が覚めた時は驚いたよ。

知らない部屋にいたんだから。

じいさんが言うには近くの湖の岸に私達が倒れていたのを拾ったらしい。

体力が回復してからその湖に行ってみたが、あの聖域とは違う場所。あの聖域からどうやって此処まで来たんだ？

瞬間移動でもしたのかよ。ありえねえ。

とりあえず名前を聞かれたから”リン”と名乗った。

小夜の名前は教えていない。

妹と言っている。

ハウエルのじいさんは昔は土の賢者と称えられた凄腕の魔術師らしい。

私は昼は本を盗み見て魔術の訓練を、夜は同じように本を読んで世界の事を調べながら生活をしている。

ここは、私達がいた世界とは違うらしい。

魔法があつて人とは異なる者”亜人族”がいる世界。

最初は信じられなかった。

信じたくなかった。

だけど、魔法を見せられたり、亜人族がじい家に頻繁に訪ねてきた。

信じるしかなかった。

これが現実。

だけどそれは私が力を手に入れられるという現実だった。

魔法はこの世界の人間は力の差はあれど誰でも使える。

魔法は力だ。

そしてこの世界に来た私にも魔法が使える。

だったら、手に入れるしかないじゃないか。

だってそうだろう？

私は無力だ。

力が無かったから小夜を助けられなかった。

力が有ったら、きっと小夜を助けられた。

きっと、じゃない絶対に。

力を手に入れば小夜を守れる。

小夜は：眠り続けている。

死んではいけない。一命は取り留めた。

だけど、動かない、瞬きをしない、話さない、笑わない。

息をするだけの人形。

傷も残ってしまっている。

肩から横腹に斜めにはしる歪な痕。

許せないと思った。

誰が？あの俺様王様か？気持ち悪いと言ったあの女か？小夜を斬った騎士か？

：違う、私だ。

私が、私を許せない。

だから私は力を手に入れる。

絶対に。

精神を集中させる。

右の手首にある白い石のブレスレットに魔力を送る。

石が淡く光る。

フリーズ・アロー
「氷の矢」

5つの氷の矢が生まれ、放たれる。

カカカカッと木に突き刺さる。

突き刺さるだけ。

私の属性は氷。

氷が操れる属性なのだそうだ。

属性には色があつて、氷は白。

だからブレスレッドの石は白い。

魔法は魔力を込めれば込めるだけ威力が増す。

まだ、だめだ。

魔力というものを理解して操れるようになったけど、力が弱い。

ブレスレッドの補助がなければ低級魔法の氷の矢さえ出来ない。
フリーズ・アロー

悔しい、まだ守れない。

自分の身さえも守れない。

それに、なぜ小夜が斬られたのかも分からない。

推測はいくつか立てているけど。

一番可能性が高いのは、”石柱に触ると黒になった”からだ。

私の髪の色もなんか嫌われていたし、この世界では黒はタブーなのか？

いや、じじいは全く気にしていないみたいだ。

あの女が石柱に触った時は金色になった。

光だなんだと言って喜んでいたし、俺様野郎も守るとか言ってたな。
金色⇨光？

これはほぼ確実だろう。

だったら黒は…

「リン。どうじゃ上手くいつておるかのう。」

声がして振り向けば、予想通りハウエルが立っていた。
長い髪に長い髭は白くなっていて、顔にはしわが刻まれている。
緑の目は一見優しそうに見えるが、油断が無い。

しかも私が本を盗み見て魔法を練習している事にも気が付いていやる。

「後ろに立つなつて言つてんだる糞爺。」

「ふおつふおつふおつ、そうカリカリしていると出来るものも出来ないぞ。」

「余計なお世話だ。」

ちつ、食えないじいさんだ。
何を言つても受け流される。

「なんか用かよ。」

じじいを睨む。

邪魔すんじゃねえよ。
フリーズ・アロー
氷の矢の的にしてやろうか。

「リン、お前に客が来ておる。」

「…客？」

なんで私に。

こつちに知り合いなんていないんだけど。

「のう、リン。」

「なんだよ。」

じじいが私をまっすぐと見る。
まさか、あいつらが追ってきたのか。

「客人に会うか？」

「はあ？」

なに言っただこのじじい。

「会わなくとも良いのだぞ。」

「…私に用があるんだろうが。会わないわけにはいかねえだろう。」

じじいの目が揺らいでいるように見えた。

…気のせいだ気のせい。

「律義じゃのう。」

「うつせえよ。客待たせてんだろう。先に行くからな。」

やっぱり気のせいだった。
いつものじじいだ。

じじいを置いてさっさと歩きだす。

後ろは見えない、振り向かない。

とりあえず、あいつらだったら氷の矢を力^{フリーズ・アロー}が尽きるまで当てる。

んで、小夜と逃げる。

計画性がないとかさっさと逃げるとか言うんじゃないぞ。

鏡よ鏡。全てを知り、全てに答える魔法の鏡よ。
世界で一番美しいのは誰？

白雪姫を助けられなかった獵師は、小人と出会いました。
小人は言います。「力を手に入れたいか。」

獵師は答えました。「

」

小人は悲しく笑います。

白雪姫は眠ったまま。

雪に守られながら眠ります。

第5話 小人と獵師（後書き）

主人公は言葉が男口調になっていきます。

トリップする前から女らしい口調ではなかったのですが。

理由は自分が小夜を守れなかったのは女だから……？という考えが心の奥にあるからです。

半分無意識、半分意識ぐらいで男口調になっています。

だから時々、弱気になった時とかには素の口調が出てきます。

小夜の事は友愛や親愛で守ろうとっていて、恋愛的な要素はないです。

第6話 狼に出会った狩人

客室には男がいた。

黒い獣耳にゆれる黒い尻尾。

目は紅く、縦に亀裂が入っている。

亜人族の獣族^{ビースト}だっけ。

たしか獣の一部を持つ獣族^{ビースト}は身体能力が高くて”獣化”って能力を持ってるんだよな。

にしても結構若いな。20代後半って所か？

犬とか狼っぽい耳と尻尾だ。

向かい側のソファーに座ると、じじいが私の隣に座った。

おい、なんで隣に座るんだよ。ほかがあるだろうが。

「お前がハウエルが拾ったという娘か？」

「ああ、そーだよ。そういうアンタは誰なんだよ。私に何の用だ。」

「私は革命軍、第？騎士隊の隊長をしているシャオエンと言う。」

なんか無表情で淡々と話すなこいつ。

ふーん、シャオエンって言うんだ。

「革命軍？聞いたことねえな。」

「…何？」

そう言うときシャオエンはじじいの事を睨んだ。

「ハウエル、貴様なにも話していないのか？」

「ふおつふおつ、まだ早いと思ったからのう。」

「ほざけ。」

何の事だ。

じじいとこいつは知り合いみたいだな。
私の名前を教えたのはじじいか。

「どういう事だ、説明しろじじい。」

ふむ、と髭を撫でる。

「…本当に知りたいのか？知っては、後には戻れぬぞ。」

知っては後には戻れぬ、か。

シャオエンは”革命軍”と言った。

何を革命するのか？

一つ浮かび上がるのは”国”だ。

国を作るのは人しかおらず、亜人族は小規模な集落や村しか作らない。

そしてこの世界には国と呼べるのは一つしかない。

人の国が一つしかないからだ。

これを知った時は驚いたよ。

その国の名は アルディアス王国、強大で広大な国。

王の名は カム …あの俺様野郎だった。

自分の事を王様って言うていたのは本当だった。
憎い憎い、小夜をあんな目に合わせた男だった。

私に会いに来たってことは私について何か知っているという事だろう？

じじいは私の事を話していないみたいだな。

「ああ、知りたいさ。後戻りができないの？

…上等さ。後戻りできないのは今も同じだよ。」

狩人は森の中で狼と出会いました。

おばあさんは狩人を止めますが、狩人は赤ずきんを守るために狼について行ってしまいました。

狩人が狼に連れて行かれるのは森の外？それとも更に深い森の中？

第7話 あのアヒルの子は

「お前は何を知りたい？」

シャオエンが私に聞く。

「全部。」

そう、私は何も知らない。

魔法の事はじじいに教えてもらった。

本で分かる程度にはこの世界の事を知っている。

だけど、それだけだ。

それだけしか知らない。

「全部、教えろ。」

なんで私を訪ねてきたのか、革命軍とは何か。」

なんで小夜があんな目に会わなくてはいけなかったのか。

「アンタの知っている事を全部教えろ。」

「…本当になにも教えていないのだな。」

シャオエンが溜息をひとつ吐く。

「ふおっふおっ、すまんのう。」

謝る気ねえだろう、糞爺。

「…なぜ、お前を訪ねてきたかだったな。

我ら革命軍はお前を…いや、お前ともう一人の娘の事も、神子に選ばれた女の事も知っている。

この世界とは異なる場所から召還された事も。そして、あの国でどんな事があったのかも。」

どんな、事があったのかも。

それは小夜があゝの石柱に触ると色が黒くなって、斬られた事も？
なんで異世界から来た事も知ってるんだ。

「密偵でも忍ばせているのか？」

動揺を隠しながら皮肉するような口調で言う。

「…そうだ。」

認めていいのかよ。

まあ、私なんか知られても問題ないか。
でも、小夜の事は何も言わない。

…味方、なのか。味方と思っいていいのか。
だけど、それなら。

なんで、助けてくれなかった。

声に出そうになった言葉を飲み込む。

そんな事は言えない。言わない。

私が、弱かったから小夜を守れなかった。
私が弱かった。

それだけだ。

「それならあの聖域で起きた事は知っているんだな？

なんで、あの女は受け入れられた。

なんで…小夜が斬られたんだ。」

小夜の名前を出すのは嫌だったけど、言わないといけない気がした。こいつは理由を知っている。そんな確信があったから。

「簡単な理由だ。

あの女が”光”で、…サヨ、といったか？その娘が”闇”だったからだ。」

「…それは、属性の事だよな。

闇だとなにかあるのか？」

属性の事を知ってから予想はしていた。

黒は夜の色。そして夜は闇だ。

あの石柱は夜空のように変わっていた。

闇だったから小夜は斬られた？

そして私はあの城で敵意を向けられているように感じていた。

いや、完全に睨まれていたし不吉なモノを見るような眼で見られていた。

それは私の髪が黒いから…？

「あの国は、人間は光の女神を信仰している。

盲信、狂信、そう言ってもいい。

”光”は清らかで美しく至上だと思っている。

そして、穢れていて醜く不吉なものとして光の対極である”闇”を迫害している。」

ヒュツと息を飲む音が聞こえた。

「さ、よが…小夜が、”闇”だったから？」

それ、だけで。そんな理由で、斬られたのか。」

それだけの理由で、小夜は眠り続けているのか。
そんな理由で生きた人形になったのか。

…ふざけるなっ！

白いアヒルの子の中に、毛色の変ったアヒルが一匹。
醜い醜いアヒルの子。

追われたアヒルの子は冷たい冬を過ごします。

湖を氷が張っていきます。冷たさが覆っていきます。

でも、知っているのです。

群れを率いる狼王や土の中からそつと見守っている土の精霊^{フェンリル}は知っているのです。

春が訪れたら、あのアヒルの子は美しくなる事を。

雪が溶けて大地に花が咲き誇り、冷たい風ではなく温かい風が吹くようになつたら、大きな翼を広げて大空に飛び立つ事を。

知っているのです。

アヒルの子は眠ります。

時が来るまで眠ります。

第8話 鼠の嫁探し

誰が、闇が穢れていると言った。

誰が、光が清らかだと言った！

結局はどちらもただの力だろうか？

力自体に善悪は無い。あるはずがない。

力を扱う者が悪い者か善い者か、それだけだろっがっ！

なのに、なのに、なのに、なのに、闇が悪で光が善？

あの子が、ぽわぽわしていて甘いものが大好きでぽわっとしていていつも危なっかしい。

そんなあの子が闇だっただけであの子が悪だとは？！

あの子が斬られたのを気持ち悪いと言ったあの女が善だどつ？！

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、
ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、
ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、

!!!

「落ち着きなさい、リン。」

「あ、
…じ、
じい？」

肩を抱きしめられる。

「魔力が乱れておる。」

魔力は感情に引きずられやすいからのう。

「このままでは暴走してしまうぞ?」

暴、走。

魔力が乱れて、自力ではコントロールが出来なくなること。
最悪、死ぬんだっけ。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

憎悪を心の底に沈殿させて、表面は冷静に。

まだ、死ぬるわけがないだろう。

「…落ち着いたか？」

シャオエンに無表情で問いかけられる。

本当に表情が変わらないな。

暴走したら周りにも被害があるんだぞ？

恐くねえのかよ。

それとも、暴走しても私の魔力は弱いから問題が無いとでも？

…いや、これは私の被害妄想だ。

落ちつけ自分。

「ああ、問題ねえよ。」

…あの女は光だったから神子に選ばれたのか。

でも、なんで異世界から召還する必要があった。

そして、なんで私達も召還されたんだ？」

モンスター
「魔物の増殖と凶暴化。それが理由だ。」

モンスター
「魔物：。」

この世界は私達がいた世界と生態系はあまり変わらない。
馬や牛、猫や鳥もいるし、魚も普通にいるし、狼も。

そういう動物の一部と能力を持つのが獣人^{ビースト}。
って今は関係ない。

モンスター
魔物はそれとは異なる異形のもの。
定番なのはスライムとか。

モンスター
「魔物は闇より生まれると人間は信じている。
それが闇を迫害する原因の一つだ。
だから闇に対抗できる光の召還を行った。
……が、それは表向きの理由だ。」

表向き？

「どういうことだ。」

「お前らを召還したのは王族だ。
王族は光の女神の血を引いているとしている。
実際、光属性は希少だが、王族はほぼ全員が光属性。
しかし、女が生まれにくく、今の王族には姫がない。」

まさか。

「え、ちよつと待て。
それってもしかして光属性の女を召還するためだけに……？」

「光の神子とすれば箔もつくし、王族に世話になるのなら婚約した
としても不自然ではないだろう。」

嫁探しかよっ！
そんなんに私達は巻き込まれたのか。

「恐らく王族は”光の女神が魔物から我等を守るため、神子を天から遣わせた”とでも国民に公表するだろう。
もしかしたら”我等を惑わそうと闇の神子も現れたが、我らが滅ぼした。我等は悪しき闇などには惑わされぬ。”とも言つかもしいないな。」

闇：小夜の事か。
あの糞野郎。

「王族は、私達が死んだと思っているのか？」

「”聖域は光の女神が守護する場所、悪しき闇を生かしておくはずがない。闇は光に討ち滅ぼされたのだ。”

お前らは死んだと思われる。
それよりも光の神子様に夢中だからな、別に生死はどうでもいいのだろう。」

むかつくが、都合はいい。
しかもあの女に夢中、ね。

「そうかよ。
んで、”革命軍”ってなんだよ。
王国を革命でもするのか？」

ある鼠の一家に、それは美しい鼠がおりました。
ある日鼠は自分に合う、美しい嫁をと考えました。

鼠は暗い穴の中に住んでいたので、空に輝く太陽を嫁にもらう事にしました。

そして鼠は太陽を自分呼びました。

するとどうでしょう、太陽と共に暗い夜と冷たい雪が来てしまったのです。

怒った鼠は夜を追い出します。

冷たい雪も太陽と一緒にいれば溶けてしまつと夜を追っていききました。

鼠の家は明るい太陽に照らされ、幸せに暮らしましたとさ。
身を焦がすと知らずに。

第9話 お姫様を迎えに来るのは

「遠からずも近からず。」

我等は均衡を戻すために存在する。」

「均衡？」

「そうだ。」

この話はハウエルの方が詳しい。」

「そうじゃのう。」

近くもなければ遠くもない。
均衡？なんのだ。

「どついう事だじじい。」

ふむ、と髭を撫でる。

「この世界はのう、様々な”意思を持つ者”が存在することによつて支えているのだよ。」

ヒューマン 人間、ビースト 獣族、フェアリー 妖精族。

木や花などの植物も、動物や虫も弱いが意思を持つのう。
意思の強弱はあるが全て世界を支えているモノじゃ。」

フェアリー 妖精族…？

ああ、亜人族のひとつか。

「意思を持つ者」が世界を支えている…？」

「そうじゃ。」

じゃが、それは全てがバランスよく存在するためじゃ。存在のバランスが崩れれば支える事が出来なくなる。

…人は力を持ち過ぎ、光を崇め過ぎた。」

ふう、と息を一つ吐く。

目に鋭い光が宿ったように見えた。

「のう、リンよ。」

神はどのように力を得ているのだと思うかのう？」

「神？存在するのかよ。」

神様は強い力を元々持つてんじゃねえのか。」

「ふおっふおっふおっ、神はおるぞ。」

曖昧で不確かだが存在するのじゃ。

神はこの世界を支えるモノ。

監視者であり観察者であり調停者であり守護者である。」

はあ？神が世界を支えている？

「じじい、”意思を持つ者”が世界を支えているんじゃなかったのか。」

矛盾してんじゃねえか。

「ふむ、ではもう一度聞こうかのう。」

神はどのようにして力を得ているのだと思う？」

「…」意思を持つ者」から力を得ているのか？」

話の流れからしてこれしかねえだろ。

「大雑把に言えばの。」

この世界の人間は大小あれど魔法を使える。

それを言いかえれば全ての人間が魔力を持っているという事じゃ。
そして魔力には属性がある。

紅蓮の火、蒼く透明な水、不動の土、止む事のない風。
そして、輝く光と漆黒の闇。

全ての属性には意味があり、善悪など無い。

種族と力。

この2つが合わさり、バランス良く存在するからこそ、この世界は存在する。

種族としての人は増え、力を持ちすぎた。

力としての人は光を強くし過ぎ、闇を弱くした。

…いや、人間^{ヒューマン}ではなく アルディアス王国、じゃの。

バランスが崩れ始めているのだよ。」

「バランスが崩れ始めた事によって、被害も出ている。」

シャオエンが再び口を開く。

「魔物^{モンスター}の凶暴化と増殖。

いくつもの王国の村が壊滅をしている。」

「魔物は闇から生まれるんじゃないかったのか？」
モンスター

だから闇が迫害されているんだろう？

「そう信じているのは人間」
ヒューマン

アルディアス王国 ヒューマン の人間だけだ。

モンスター 魔物はバランスの歪みから生まれる異形の者。

意思を持たぬ、破壊するだけの存在。

どんなにバランスがとれていても、歪みは生まれる。

だから昔から魔物は存在した。
モンスター

だが、バランスが崩れ始めたがために歪みを大きくなり、魔物の
モンスター 増殖と凶暴化につながっている。」

バランスが崩れ始めている。

それは人間の国、ヒューマン アルディアス王国 が光を崇めて、闇を迫害し
ているから？

革命軍は、均衡を取り戻そうとしている。

だから国を革命するのは近からずも遠からずってことか。

「いくつもの村が壊滅しているって、国は何してんだ。

そついうのに対処する…軍隊とかはないのかよ。」

「あるにはある。

有事の際に戦う騎士団。たしか”銀翼の騎士団”だったか。

だが、そこは汚職や貴族の出世の踏み台にされている。

正常には機能していない。」

うつわ、本当に腐ってんな。

「それで、私にその話をしてどうするつもりだ。
仲間になれとも言うのか？」

情報を教えてもらったことには感謝する。
ただどなんでも私に話したのか分からない。
じじいが私に話そうとしなかった事もだ。
シャオエンは革命軍の第？騎士隊の隊長と言っていた。
それって偉いんじゃないのか。役職的に。
説明だけなら下っ端が来てもいいはずだ。

「仲間に？それもあるな。人手が多いに越したことは無い。
だが、違う。我等は取り戻しに来たのだ。」

取り戻しに来た…？

「闇の神子を我ら革命軍に引き渡してもらおうか。」

苦しめられる美しくも健気なお姫様。
迎えに来るのは王子様？
それは絶対的なハッピーエンド。
必ず来る、終焉なのです。

第10話 アリスは三日月兎を追いかけて

闇の、神子？

…っ！小夜の事か！？

「それは、小夜の事か？」

「お前が聖域から共に逃げてきた娘がそうなのなら。」

「ふざけるな！なぜ小夜を渡さないといけねえんだ！」

あんたらなんかに、小夜を渡せるか！

味方なのかと思っただけがバカだった。

こいつは、こいつらは敵だ。

小夜を私から奪おうとする敵だ！

シャオエンの姿がぶれる。

なにが起きたか分からなかった。

気が付いた時には首を掴まれ、壁に叩きつけられた。

「が、はっ。」

足が地面につかない。

背中が痛い。

苦しい、息が出来ない。

「は、なせっ。」

「吠える事しかできない餓鬼が。
さっさと渡せと言っているのが聞こえないのか。」

無表情で無愛想なやつだと思っていたけど。
雰囲気、さっきまでと全然違う。
ピリピリしていて、痛い。

「乱暴な事は感心しないのう。」

じじいがのんびりと言う。

「神子の奪還は総司令直々の任務だ。
部下から近づく事が出来ないと報告があった。
ハウエル、神子に結界を張っているな？」

結界？

じじいが小夜に？
なんで？

…だめだ、頭が回らない。

「それに、何故保護をした事を報告しなかった。
貴様、裏切るつもりか。」

「…っあ。」

鋭い爪が肌に食い込む。
痛てえ。
生理的に涙が浮かぶ。

ヒュウヒュウと自分が息をする音がうつとおしい。
悔しい。
弱い自分が悔しい。

「…はっ。」

小夜、は、絶対に…渡さ、ないっ！」

やばい、気が遠くなってきた。

「あれはわ、たし…が、守らなくて、は…いけ…ない。」

私が、守らなくてはいけないんだ。
重い手を動かして、首を絞める手を掴む。

「
」

目の前が霞んでいく。
世界の境界線が溶けていく、無くなっていく。
白く霞んでいく。

強く、強くなりたいよ。
誰にも負けないくらい、誰にも屈しないように。
どんな敵からも守れるように。
優しい君を守れるように。

ごめん、小夜。

ぶつり、と世界が消えた。

アリスは兎を追いかけて、穴に落ちてしまいました。
落ちていく、堕ちていく。
暗い世界を落ちていく。
終わりのない穴の中、光が遠くなっていく。
君が遠いよ。

第11話 迷子と帽子屋

意識が覚醒していく。

ぼんやりと目を開ければ、見慣れ始めた天井が見えた。

あ、れ？ここ私の部屋…？
なんで？

「…っ、小夜！」

ベットから飛び降りて、廊下を走る。
思い出した。

なんで気絶なんかしたんだ私！

しかも今、朝だよな。

何時間、寝てたんだろう。

小夜は無事？

お願いお願いお願いっ！

廊下を駆け、小夜の部屋を開ける。

「小夜！」

誰もいない。

からっぽのベッド。

どこにもいない。

「あ…小夜…？」

いない、どこにもいない。

「部屋、間違えたのかな。」

そうだよ。小夜がどこかに行くなんて、私を置いていくはずがない。おぼつかない足取りで隣の部屋のドアを開ける。

「…小夜？」

いない。

ありえない。小夜は私を置いていかない。違う、この部屋じゃないんだ。

次第に駆け足になって、絶望感が押し寄せてくる。

だけど、どの扉を開けてもどの部屋を探しても見つからない。小夜がいない。

「小夜っ！」

最後の部屋。

空っぽの部屋。

誰もいない。

小夜がいない、どこにもいない。見つからない。

足元から崩れおちる。

床にへたりこんだ。

体に力が入らない。

動けない、動く事が出来ない。立ち上がれない。

「リン。」

「…じじい？」

どのくらいそうしていたんだろう。

名前を呼ばれて振り向けば、じじいがそこにいた。

「小夜が、いないんだ。」

「ああ。」

「どこを探してもいないんだ。」

「ああ。」

「あの子は私が守らないとなのに。」

「ああ。」

「どこにもいないっ。」

涙があふれる。

頬を伝って、ぽたぽたと落ちていく。

喉の奥が熱くて痛い。

消えた、消えてしまった、連れて行かれてしまった。

私の前から消えてしまった。

私はまた守れなかったのか。

「なんで？なんで小夜を連れていけないとなの？
あの子は寝てるんだよ？起きちゃうじゃないか。」

心がからっぽに、なちゃったみたいだ。

「なんで、小夜を連れていったんだっ！

答えろじじいっ！」

声を振り絞って叫ぶ。

吠える事しかできない餓鬼。

ほんとうだね。

本当に、私は吠える事しか出来ない。

叫ぶ事しか出来ない。

泣く事しか出来ない。

無力だ。

これも私が弱いからなのかな。

ねえ、誰か答えてよ。

私が強かったら、小夜を守れましたか…？
連れて行かれるのを止められましたか…？

沈黙が満ちる。

ゆっくりとハウエルが話します。

「…革命軍の目的は聞いたじやろう？

調和を戻す事。それが我等の目的じや。

今、調和が乱れておるのは光と闇のバランスが崩れたからじや。

それはのう、リンよ。

言いかえれば、我等は闇を取り戻そうとしているという事じや

よ。」

「…だから、小夜なのか。
闇属性の小夜を連れていったのか？
闇の神子として？

小夜を闇の神子として祭り上げるのか。

あの光の神子みたいに。

あいつは闇の神子を引き渡せと言っていた。

そんなの、考えつくのは一つしかないじゃないか。

祭り上げて、象徴とする。

小夜が眠っているのは、闇の力が弱っているからだって。

そう言えば大義名分になるよな。

そうだよ、そうだよな。

戦う事に理由を欲しがる。何事にも理由がある。

それが人だ。」

次々と言葉が出てくる。

頭が混乱して、全てが曖昧で。

自分が何を言いたいのかわからなくなる。

だけど、分かっている事が一つだけある。

もう小夜は戻ってこない。

「…ああ、そうじゃ。」

ああ、やっぱり。

もうだめだ。

もう無理だ。

限界だよ。

「のう、リンよ……………」

あ、れ？

「リン？」

「じじい、なんか言ったか？」

「…いや、なにも言っておらぬよ。」

頭がズキズキとして痛い。

なにか聞かれた気がしたんだけど。

…いや、いまはそんなことはどうでもいい。
早く、小夜を取り戻さないと。

「追いかけるつもりかのう。」

もう、あやつらは本部に着いていると思うぞ。」

そんなに私は寝ていたのか。

「じい。革命軍の本部はどこにある。」

「それを知ってどうするつもりじゃ？」

「はぐらかすな。分かってるだろう。」

小夜を取り戻す。」

早く早く、迎えに行かないと。

あの子が泣きだす前に迎えに行かないと。

迷子になるといつもあの子は泣くから。

早く迎えに。

「無駄じゃと思うぞ。」

なにしろ辿り着くまでが難しい。

獣人族^{ビースト}のあやつらだからこそ、短い時間で安全に守りながら辿り着けるのじゃ。

本部に行けたとしても追い返されるか、殺されるだけじゃよ。」

「じゃあ、どうすればいいんだよっ！

守る事も出来なかった。追いかける事も出来ない。

このまま黙って見ていても言うのか？

そんなの出来るわけがないだろうがっ！」

あの子は私が守らないとなんだよ。

守らないといけないんだ。

「リン、わしの弟子にならぬか。」

弟子…？

急に何を言い出すんだ。

「おぬしは弱い。」

これから先、このままではサヨを守る事も、自分の身さえも守る事は出来ないだろう。

じゃから、わしの弟子となれ。

ワシの知識を全て教える。」

やっぱり、私は弱いんだ。

「弟子になったら、強くなれるのか。守れるぐらい、強くなれるのか？」

「ワシを誰じゃと思っている。

土の賢者・ハウエルじゃぞ。」

そんな事言っていたっけ。

じじいが手を差し伸べる。

掴めと言っように。

ああ、いいよ。

強くなれるのなら。

屈する事のない力を手に入れられるのなら。

あの子を守る力を手に入れられるのなら。

私はあんたの手をとったんだ。

アリスは剣を手に赤の女王に戦いを挑みます。

隣に立つのは狂^{導く者}った帽子屋。

赤と白と、それに黒。

最後は全てが混ざって、なんにも分からなくなった。

第11話 迷子と帽子屋（後書き）

大きい空白の前後でリンの心理が変わったのは理由があります。
へばい理由ですけど、出せるのは後のほうだろうな！。
ネタバレが出来る所まで頑張ります。

閑話 鏡の向こう側で笑う

「なんで私がこんな地味なの着なきやなのよ！」

手に持っているドレスを目の前の侍女に投げつける。

「ですが、今回の夜会は第2王女・シエリア様の誕生日を記念した
ものでもあります。

ですから…っ。」

パシンツ…と乾いた音が響く。

「は？何言ってるの。」

私は光の神子なのよ？私の言う事が聞けないのぉ！？」

「、すぐに別の物を用意させます。」

頬を赤く腫らした侍女が部屋から出ていく。
長い爪が引つ掛かったのか、血が出ている。

一目で贅が凝らされていると分かる部屋には、光の神子とよばれる少女がいる。

金色の髪は丁寧に結えられ、艶やかに光っている。

身に付ける物は一流の職人が一流の素材を使って作ったもの。

自分の言う事をなんでも聞く侍女達に、お願いすればなんでも叶えてくれる王子様達。

私ね、とっても幸せなの。

金色の髪がとても綺麗だって褒めてくれるの。

これが欲しいって言ったらすぐに買ってくれるの。

あれは要らないって言って言ったらすぐに捨ててくれるの。

そういえば、ここに来てから髪が金髪のままなのね。

なんでかなあ？

ま、いいや。だって綺麗だって褒めてくれるから。

ねえ、私ね。

もっと欲しいの。

あれも欲しい、これも欲しい、もっともっと欲しいの。

綺麗な宝石やドレスも、愛を囁く王子様も、美味しいお菓子も、

楽しい事も、全部全部全部全部！

ぜんぶ欲しいの！

ああ、だけど。

私のお願いを聞いてくれないのは要らない、私を悪く言うのもいいらない、私を不快にするのも要らない。

ねえ、私の言う事聞いてくれるよね？

「もちろんだよ、光の神子。」

ああ、嬉しい！

私、とっても幸せよ！

ブログ 私の幼馴染の名前

小夜。

私の幼馴染の名前。

私の親友の名前。

小さい時から一緒にいて、いつも隣にいた。
笑って泣いて怒って喧嘩して、また笑って。
記憶をたどればいつも隣に君がいる。

ねえ、小夜。

こんな訳のわからない世界に来て、訳のわからない基準で小夜は悪にされた。

でもね

小夜が『闇』だって分かった時、心のどこかで納得している自分がいたんだ。

『闇』だったせいで、あなたは眠り続けているのだけど。

『闇』はね、『夜』に通ずるんだって。

満ち欠けする月と沢山の星。

淡く、だけど強く輝くものを包み込んで、夜は存在する。

穏やかな深い闇で包み込んで、安息の眠りをもたらす。

あなたはね、私にとってそんな存在なの。

いつも隣にある夜の『闇』であって、月や星みたいな輝く『光』

。

眩しい太陽が沈むと夜が来て、私はとても安心する。

そして私は月や星を頼りに歩くんだ。

ちよっと、分かりにくいかな？

ねえ、小夜。

『氷』はね、強い太陽の下にしていると溶けちゃうんだ。

光の眩しさに溶けちゃうんだ。

氷は溶けたら水になって、氷という存在は消えてしまうんだ。

消えて、なくなってしまうんだよ。

ここは、とても眩しいよ。

小夜が遠くに連れていかれて、私の『夜』が無くなっちゃった。
周りが眩しすぎて、なにを頼りに歩いたらいいか分からないよ。
だから、早く。

目を覚まして

帰ってきて

隣にいて

笑って

私が溶けて消えちゃう前に
守れるように。

もう二度と、奪われないように。

君の近くにいられるように。

強く、強くなるから。

第一話 魔法

小夜が連れていかれて、どれくらいたったのだろうか。

なんだか、小夜がいなくなって時間の感覚がおかしくなったみたい。

一日もたっていないような気もするし、遠い年月がすぎたような気もする。

「リンは『魔法』の事をどれくらい知っておる？」

ハウエルが長くて白い髭を撫でながら、私に問う。

「『魔法』は『魔力』を持つ者が使役できる力。

『魔力』には『属性』があり、その属性によって使える『魔法』が異なる。

属性は火・水・風・土の『四大属性』、雷・氷の『亜系属性』、光・闇の『根本属性』。

そして、属性には決まった『色彩』がある。

火は『赤』、水は『青』、風は『銀』、土は『緑』または『茶』、雷は『紫』、氷は『白』、光は『金』、闇は『黒』。

知っているのは、これだけ。」

この世界の文字が読めると分かって、知識を得るために私は本を読みまくった。

無知は罪と言うが、私はそうは思わない。

知ろうとしない事、無知を自覚しながら知ろうとしない事が罪、そう私は思っている。

私はこの世界の事を知らない。それを私は自覚した。だから、知ろうとする。その方法が『本を読む事』だった。

それは、ハウエルの事を信用していなかったからなんだけど。だけど、これからはハウエルにこの世界の事を教えてもらおうと思う。本から知るには限界があるから。

…ハウエルの事を全面的に信用した訳ではないけど、ハウエルは私の知らない事を知っている。

それに『強くする』と言ってくれた。

だから私は、ハウエル土の賢者に教えを請う。

「ふむ、リンは記憶力がいいようじゃ。基礎は問題ないのう。」

そう言い、ハウエルは本棚から一冊の本を取り出した。

「『魔導書』と呼ばれる、魔法について書かれている本じゃ。

これは『氷』の魔導書。今読んでいる本よりも詳しく書いてある。

」

「…こつそり、読んでいるつもりだったんだけど。やっぱり気付いてたんだ。」

私はハウエルに隠れて本を読んでいた。隠していたつもりでも、バレバレだったみたいだ。

今思えば私が隠していた秘密は、嘘はなんて脆いものだったのだろう。

小夜の事、異世界の事、私の事。

少しでも揺らげば壊れてしまう、そんな嘘だった。

ハウエルは、初めから全て分かっていたのだろうか。

分かっている、隠していたのだろうか。

私達を守ろうとしてくれていたのではないか、そんな事を思って

しまう。

…だめ、そんな事を思ってはだめ。
いつか、裏切られるかもしれない。信用してはいけない。
私が、小夜を守る。

守るためには強くなけてはいけない。

この世界の人間を、小夜を斬った人間を、信用してはいけない。
馬鹿な考えだって、分かっているけど。

「この魔導書に書いてある魔法を、全て出来るようになれ。
全て、全てじゃ。」

これに書いてあるのは基礎。出来なければ問題外じゃ。」

「全て出来るようになったら？」

「…自分の魔法を見つけるのじゃ。自分の、魔法を。」

「自分の？なんだ。」

「その内分かと思うが、魔法によって得意な物と苦手な物が出てくる。」

得意な物は使いやすく、発動が速い。

苦手な物は使いにくく、発動が遅い。

発動が速ければ敵に隙を与えにくく、発動が遅ければ隙を与える
からのう。

自分の魔法を見つけ、そしてそれを強化する。

うむ、見つけて強化するだけではないな。

中には自分の魔法を『創った』者もいる。」

つまり、切り札を作るって事か。

まずは、この魔導書に書いてある魔法を全部出来るようにならな

いとな。

『氷』の魔導書か…。

「…なあ、じじい。」

『氷』の魔導書って事は『闇』や『光』の魔導書もあるのか？」

「あるぞ。」

「じゃあ、それも寄こせ。」

「ふむ…何故かのう？」

ハウエルは苦笑しながら私に言う。

何故？分かってんだろぅが。

「敵の手の内を知っていても損はない。」

小夜が目覚めた時に教えられるようにするためだ。」

『光』を知るのは、あの女の手の内を知るため。

『闇』を知るのは、小夜に教えられるようにするため。

小夜は魔法とか好きだったから、絶対に教えて！って言いそうだし。小夜が目覚めた時、何も出来ないなんていやだからね。

第二話 雪

また時は流れて、空から白い花が降るようになった。
息を吐けば白い。

音もなく、雪が世界を埋め尽くしていく。

雪は好きだ。

いろんなものを隠してくれるから。

小夜が、楽しそうにするから。

小夜が嬉しいと、私も嬉しいから。

雪は好きだ。

ああ、このまま。

何もかも雪に埋もれて、消えてしまえばいいのに。

雪は死を運んでくる純白の死神だ。

「寒くないのか。」

抑揚のない低い声。

声の方を見れば、大嫌いな男。

黒い髪、紅い目。

狼の耳、尻尾がゆらりと揺れる。

相変わらず無表情で、何を考えているのか分からない。

白い雪の中で、黒はとても目立つ。

「よお、シャオエン。話は終わったのか？ だったら、さっさと帰れ。」

今日は、じじいに話があるとかでシャオエンが来ている。

会うのは、忌々しいあの日以来だ。

私も一緒に話を聞けと言われたが、大嫌いな奴と同じ所にいるなんて考えられない。

だから外に避難してたのに、なんで来るのかなあ。

「質問に答えろ、そうすれば帰る。」

「…なんだよ。」

「1・習得はどのくらい進んでいる。」

「…7割。」

「2・どんな魔法が得意だ。」

「ゴーレムとか。」

「3・苦手は。」

「遠距離魔法。」

「4・革命軍に来るつもりはあるか。」

「…小夜がいるから、行く。」

「…って言うか、その質問なんなんだよ。」

「総司令から聞けと言われたから聞いたただけだ。」

総司令ねえ。

よく聞く言葉だけど、どんな人なのかは聞いたことが無いな。
別にいいけど。

「だが、2年で7割か。」

「…なに、文句でもあるの。」

「いや、ない。」

だったら言うなよ。

習得した魔法で攻撃してやろうか。

…いや、絶対に10倍ぐらいやり返される。
止めておこつ。

「そうかよ。」

シャオエンの頭に雪が積もっている。

違和感があるのか、耳がぴくぴく動いているけど、払い落とせな
いらしい。

イライラする。

「…おい。」

「なんだ。」

「しゃがめ。」

「なんでだ。」

「いいからしやがめ。頭を下げろ、低くしろ。」

届くようになった頭を叩いて、雪を払い落す。
多少の怨みも込めて。

「はい、終わり。」

「……………」

なにか言えよ。

お礼とか感謝とかお礼とか。

いや、こいつに「ありがとう」とか言われたくないな。
鳥肌が立つよ、絶対。

「一応、お前にも報告しておく。

闇の神子…さよ、だったか？に変化はない。」

「…そう。」

小夜は、やっぱり眠ったままなんだ。

今は寒いから、布団から出られないのかな。

あの子、寒いのが苦手だったから。

暖かくなったら起きるよね？

「あとは余談だが、最近『眠り姫』と呼ばれるようになっていて。
愛称のようなものだろう。」

詳しい事はハウエルに聞け。」

「分かった。」

話は終わりか？」

「ああ。」

「そう。」

話は終わったのに、帰る気配が無い。
じっと見られている。

何を思ったのか、私の頭を何回か軽く叩いた。

「…なに？」

「風邪を引かないうちに家に入れ。」

そう言つと、来た道を引き返して行つた。

雪の中に、点々と足跡が続いていく。

…なんだつたんだ。

閑話 ある女の話

こんにちは。もしくはこんばんは。ああ、おはようってこともあるね。

彼女の…白の少女の物語はいかがだろうか？

え、私？

んー、そうだね…その内分かと思うから今は秘密。

だけど、『私』について少し語ろうか。

これから語る事にも関係があることだしね。

私はこの世界で妖精族フェアリーという種族になる。

妖精族は長寿の一族でね、私もそれなりの年月を生きている。

そんな種族の中でも私は特に特殊なんだ。

肉体の年齢はそれなりに、だが精神の年齢はこの世界の誰よりも高い。

うん、カンの良い人は分かってしまったかもしれないね。

では、分からなかった人には答えを。

私はね、ある一定の期間を繰り返し生きてるんだ。

それはもう何百何千万回もね。

すっかり精神はおばあちゃんだよ。肉体はまだピチピチだけどね
ふふふ、信じられないって？

信じなくてもいいよ。ただ知っていればいい。これから語る話の
ために必要な前振りだからね。

さて、それでは私が繰り返している期間の話をしようか。

世界は、大きな国が4つ、中小の国がいくつかで成り立っていた。
均衡は保たれていた頃の話さ。

だけである日、その均衡が崩された。

光を盲信する国が大規模侵略を始めたのさ。あつという間に第5の大国が誕生したよ。

そして大きな国の一つが喰われてね、危機感を抱いた3つの大国は団結して大国連合が出来たんだ。

世界を二つに分けた戦いの始まりだよ。

光を盲信する国は獣族や妖精族などの人以外を亜人族として迫害してね、獣族や妖精族は大国連合に味方した。

今は普通に使われている亜人族という言葉はこの時に出来たんだよ。

長い年月をかけて定着したが、当時は差別用語だったんだ。

それが大体200年前かな。

その二つは50年ぐらい戦い続けるんだけど、結局大国連合は負ける。

そして世界はひとつになったのさ。

正しさも間違いも愚かさも罪も考えも…全てが同じになったんだ。

私は死ぬと大規模侵略が始まる30年前に戻る。

繰り返すおかげで400年の間に起こる事は全て知っているよ。

おかげで『預言者』とか『先読みの策士』って呼ばれるようになったんだけどね。

そして『世界がひとつになった日』から150年。

異世界から神子が召還された。

これも繰り返された事。

私の『知っている』事だ。

だけど、そこで私が『知らない』事が起きた。

3人目が召還されたんだ。

まったく…私が全てを終わらそうとした時に不確定要素が来るなんてね。

神は私が嫌いらしい。

ふふふ、冗談だよ冗談。

確定要素にかかるはずだった呪いも不確定要素にかかっちゃったし…。

まあ、それだけでは何も変わらないんだけど。

世界は私が『知っている』通りに動いている。

不確定要素もうまく取り込めた。

今も監視してるけど、彼女は頑張り屋さんだね。

血反吐を吐いて、血肉を削って、骨を砕いて、心を殺して。守るために力を手に入れようと頑張っている。エリーの教え方もいいから、予想よりも早く完成するかも。

まあ、あそこまで頑張るのは呪いのせいもあるんだけど。というか、呪いがあんな風に作用するとは私も予想してなかったよ。まあ、結果がいいから別にいいか。問題なしだね。

全てが軌道に乗った。

あとは終わらせるだけ、私は終わりを待つだけでいい。

終わらせようとしているものはなんなのか？

ふふ、何だと思う？

大丈夫、『世界を終わらせる』とか悪役みたいな事は思っていないから。

それに私の目的は世界を救う事につながるんだよ？

なにをするつもりかって？

うーん…じゃあ、ヒントをあげる。

何事も失うのは簡単だけど、得るのは難しいよね。つまりね。

増やせないのなら減らせばいいって事！

さあ、白つさはヤマネを守ろうと必死になっている。

だけど、ほらほら時間が無い！

急がないと女王様に首をちょんぎられてしまうよ！

そしてアリスは夢の中。

夢の国に迷い込んだアリス。

選ばれたアリスはお姫様になって綺麗な物と沢山の王子様に囲まれて幸せに暮らしましたとき。

ハッピーエンド？

ふふふ、物語は生きる限り続いていく。続く限り終わ^{エンド}りなんてないんだよ。

幸せなお姫様は足元を見ようとしない。

不安な事が無いから、見る事を知らない。

恐い事なんて無いから、見ようとしない。

足元を見て御覧なさいアリス。

あなたが犠牲にしてきたモノ達が這い上がってきているよ？

あなたが着るそのドレスは、身につける宝石は、お茶会のためのお菓子と道具は、あなたの我が儘のためにはたくさんお金が必要なんだよ！あなたに夢中な王子様にも仕事があるのに、王子様はほったらかしてるね。

そこは夢の中じゃない。現実だ！

あなたはどんなものを犠牲にしてきたのかな。どれぐらい犠牲にしてきたのかな。

ああ、アリス、アリス、お姫様になったアリス。

綺麗なモノに囲まれた世界に生きるアリスよ。

そこは愚者の楽園。

壊れる運命にある無知なる者のための世界。

私は予言するよ。

楽園の崩壊の時は近い。

私は革命者。

停滞し崩壊し歪み終わろうとしている世界を革命する者！

白も黒も金色も、人も妖精も獣も、愚者も聖者も罪人も、反逆も忠誠も革命も、全部全部全部：私の×××のために、私が本当に××のために！私は私のために世界を変える！

私の語りはこれでお終しまい。

ああ、あの子が帰ってきたみたい。

お帰り、寒かったでしょう。

あっちはどうだった？

うん、知ってるよ？見てたもん。とっても面白かったよ。

ふふふ、知ってるけど君の口から聞きたいんだ。

知っているけど知らない、雪が好きな白い彼女の話。

これはある愚者の話。

永遠に囚われた哀れな女の話。

閑話 ある女の話（後書き）

第1章の最後にある、詩のようなものはこの人の語りだったります。ずっと監視してるんです。

第三話 幸せな終わりを望む

太陽の日差しが強い。

だいぶ暑くなったが、ここは風がよく吹き過ごしやすい。
日本の夏とは大違いだ。

土で出来たゴーレムが50体。

人型が30体、狼型が10体、鳥型が10体。

氷で出来た長剣を構え、ゴーレムが仕掛けてくる攻撃を避けながら、反撃の機会を狙う。

上空から来た鳥型ゴーレムを避け、長剣で叩き落とす。

あと49体。

後ろから襲ってきた人型ゴーレムの攻撃を避け、軽く距離を置く。

「『氷の矢』」
フリーズ・アロー

氷の矢が何本も放たれ、後ろにいたゴーレムも巻き込んだ。

あと42体。

長剣を槍のように投げ、素早く新しい氷の剣を作る。

あと41体。

剣を土に突き刺すと、地面から剣山のように氷の槍がゴーレムに突き刺さる。

ちっ、何体か外れたか。

あと35体。

剣を突き刺したまま両側から来たゴーレムの攻撃を避け、相打ちにさせる。

2つのゴーレムはぶつかって、粉々に砕けた。
あと33体。

くいつと手を引く動作をすれば、剣が一直線に戻ってくる。
私と剣の間にいたゴーレムが崩れる。

あと32体。

フリーズ・アロー
再び氷の矢を放つ。

あと29体。

攻撃を剣で受け流し、背中に周り首を突く。

あと28体。

軽く距離をとり、残っている全てのゴーレムを視界に入れる。
手を前に突き出し、詠唱を始めた。

「天から降り注ぐ恵みは禍へと変わり、止む事のない罰となる。
罰は花となり、我が敵を貫くであろう。」

指先から光が生まれ、光は線を描き魔法陣となっていく。

「我が敵は冷たい死を迎える。」

スノウ・ジャッシュメント
『氷花の天罰』。」

魔法陣が光り氷の矢が放たれる。

勢いは止まず、矢は放たれ続ける。

地面に突き刺さった矢は、巨大な氷の花となり、槍の如く矢を避
けた敵を貫く。

広域無差別魔法のひとつ。

本当は魔法陣は上空に出来て空から雨のように降り注ぐんだけど、
まだそこまで出来なくて手の前に魔法陣がある。

ジャッシュメント
全ての属性に存在する『天罰』と付く魔法は威力が半端ない。
これ、結構制御するの大変だな…っ！

最後の一体が打ち抜かれ、崩れた。

「はあ…っ、終わった！」

魔力を送る事を止めると、攻撃が止み、魔法陣が消滅する。息を吐き、肩の力を抜く…ふりをした。氷の槍を作り、振り向きざまに投げる。槍は今まさに攻撃しようとしていたゴーレムに突き刺さった。

「うむ、終了じゃ。」

どこからともなく、じじいが現れる。

私はゴーレムを相手に戦うようになった。

たまに終わったと思ったたら後ろから攻撃されて終わりって事もあって、気配というものが分かってきた。

最初の頃は終わった…と思ったたら後ろからゴソツとやられて気絶、なんて事が多かったからそれなりに進歩してるんだと思う。

「一体一体に時間を割きすぎじゃ。」

50体ぐらいなら余裕で最後の『天罰』ジャッジメントで済むじやろっ。

威力の強い魔法に頼り切るのはダメじゃが、せつかく『天罰』ジャッジメントが使えるんじゃ、有効に使わんとのう。

余計な体力と魔力は使わないようにせんな。」

「…制御すんのが大変なんだよ。」

気を抜いたら魔法陣が爆発しそっだ。」

魔法陣が出てくる魔法は、威力が高い。魔法陣を通して魔法を制御しているのだ。

その魔法陣が制御できなくなると、魔法陣が爆発してこっちも痛手を負う。

威力の強い銃を使うのと近いかもしれない。使ったことないけど、爆発って言っても、火薬でドーン、みたいな爆発ではなくて衝撃波が来る。

魔法陣の欠片みたいな光も飛んできて、それが刃のように斬り裂いり突き刺さったりするから結構痛い。

「まあ、それもゴーレムの動きが鈍いからできるんじゃないかな。」

「分かってるよ。」

「…シャオエンぐらい早かったら、一瞬でやられてる。」

「あやつほど素早い者はなかないと思うぞ。」

「そうかよ。」

「だけど、いつかあの犬耳野郎に一発お見舞いしたいんだ。そういつと、じじいは苦笑しながらそうか、と言った。」

「じゃが、もうほとんど習得したと言ってよいの。」

「そろそろ、『自分だけの魔法』を考えるかの。」

「その言葉に思わず目を見開く。」

「いいのか?」

「ああ、自分の弱点とか分かってきたじやろつ。」

「そついう事も含めて考えるんじゃないぞ?」

「分かつてるよ。」

じじいには話してないが、『自分だけの魔法』はだいぶ形になっていたりする。

きっかけはシャオエンの言葉だった。

”小夜は『眠り姫』と呼ばれている。”

その言葉に私は1つの物語を思い出した。

ああ、小夜にピッタリのお伽噺だ。

私だけの魔法。小夜を守るための魔法。

きつと私はお姫様を起こす王子様にはなれないから。

私はお姫様を守る茨となろう。

『いばら姫』 『眠れる森の美女』 『Sleeping Beauty』

そう呼ばれる物語。

とある世界、とある国にそれはそれは美しいお姫様がおりました。その美しさに嫉妬した悪い魔女は、お姫様に永遠に眠る呪いをかけました。

それを悲しんだ善い魔女はお城に魔法をかけます。

お姫様が目覚めるまで、全ては眠り続け、茨が城を守る魔法を。

それから時は経ち、ある日、ある国の王子様がやってきます。

王子様は立ちふさがる茨に負けず、進み続けました。

そして、眠るお姫様と出会ったのです。

王子様がその美しさに一目惚れ。

口づけをすると、あら不思議。

お姫様は眠りから目覚めたのです。

お姫様が目覚めたことで、お城の眠りの魔法も解けました。

王子様とお姫様は恋に目覚めました。
茨が薔薇を咲かせ、2人を祝福します。
ハッピーエンドな物語。

彼女はそんな終わりを望んでいるのです。

おまけ

「…さてと、次は60体じゃの。素早さも上げようかのう。」

「え、ちょっと待て！」

50体でも結構きつかったのに、この上素早さ上げてプラス10体？！

無理無理無理無理、絶対無理！」

「うむ、そうか。」

シャオエンは軽く500体倒すかのう。」

「…やる、60体ぐらい余裕だ！」

むしろ、もっと増やして。目指せ1000体iiiiiiii！」

「（…ちよろいのう。ついでに素早さと防御も上げておくか。）」

「なんか、嫌われてる…というよりは敵対心持たれてるね、君。」

「…何の話ですか。」

第三話 幸せな終わりを望む（後書き）

眠れる森の美女は、大体こんな感じ…と書いたもので、だいぶ違う所があります。

閑話 鏡の中で嘆く

太陽が昇れば戦って、日が沈めば本を読んで知識を吸収する。
ここに来てからの凜香ちゃんの生活は、この2つを繰り返している。

…私達がここに来てどれぐらいの時間がたったんだろっ。
雪が降った気がする。暑くなった気がする。色とりどりの花も見た気がする。白い雲と青い空を見た気がする。吹き荒れる嵐も見た気がする。

皆、心配してるよね。急にいなくなっただもん。
凜香ちゃんは家族が心配じゃないの？どうしてるか気にならないの？

私を守るっていう凜香ちゃんはどこか変だ。
なんでそこまで私を守りたいの？

今日も、凜香ちゃんは傷ついている。
頬に切り傷が出来ている。女の子なのに、痕が残ったらどうしよう。

腕から血が流れている。
洋服に隠れているけど、体は痣だらけ。
それでも、少し前よりは少なくなった。

凜香ちゃんが、氷の剣を作れるようになった。
大きい泥人形…ゴーレムだっけ…毎日毎日それを相手に戦っている。

ああ、また殴られた。

だけど、凜香ちゃんはまた立ち向かっていく。
なんで、そこまでして力を手に入れたいの？

傷ついて痛い思いをして…それは、私を守りたいから？
だったら、もういい。

もう、傷つかないで。

傷つく凜香ちゃんを見るのはもう嫌だよ。

ゴーレムに立ち向かっていく凜香ちゃんに手を伸ばす。

だけどその手は幽霊みたいに凜香ちゃんの背をすり抜ける。
触れられない。声を張り上げても聞こえない。

なにも、出来ない。

「凜香、ちゃん。」

私はここにいるよ。

体は、持つて行かれちゃったけど、私はここにいる。
なのになんで気付いてくれないの？

「凜香ちゃん。」

お願い、早く私を見つけてよ。

第四話 芽吹く

その日は、花が綺麗に咲いていて、風がとても気持ちよかった。
日の光が心地よくて、昨日見た夜空は星が瞬いていたのを覚えている。

ふと、星が瞬くのは大気が揺れているからなんだよ、と小夜が言っていたのを思い出した。

「じじいー?」

私の訓練は、じじいがないと始まらない。正確にはじじいのゴーレムが無ければ、だ。だから私の朝はじじいを探し出すことから始まる。

「おーい、今日は100体倒す予定なんだけど。さっさと始めようー。」

だけど、その日はいくら探してもじじいを見つけられなかった。
長い付き合いだから、大体いる場所は分かっているのだけど。先に行っているのかもと思って、いつも訓練している場所も探したけど、いなかった。

「じじい?」

しかたなく家に戻る。すると、庭でロッキングチェアに座って日光浴をしているのを見つけた。

（人が一生懸命探してたのに、優雅に日光浴かよ）

近づいて顔を覗きこめば、目を閉じ寝ているようだった。

「そんなに見つめられると照れるのう。」

「起きてたのかよ。」

早く始めたいんだけど。今日は100体いくからね。」

心地よい風が頬を撫で、木々がざわりと蠢いた。

「ふおっふおっふお、威勢がよいのう。」

「…そうじゃ、今日はおぬしの”自分だけの魔法”を使ってみよ。練習をするにも、相手がいなくては効果は半減じゃ。」

「やっぱり、気付いてたんだ。」

「当り前じゃ。ここはわしの領域じゃぞ。おぬしが隠れてしていることぐらい把握できる。」

実はじじいに”自分だけの魔法”を作り始めていいと言われてから、こっそりと練習をしていた。ばれないように練習してたはずなんだけど…。私って隠し事が苦手なのだろうか。

「ほれ、早く訓練場所に行かんか。わしはここにいる。」

「え…、ゴーレムは？」

「ここはわしの領域じゃからのう。問題ないわ。」

ゆらりゆらりと椅子が揺れる。

「…それが、じじいの”自分だけの魔法”？」

「ふおっふおっふお。さあのう。」

それは肯定か否定か。ハウエルはゆるりと笑った。

ぼつかりと土がむき出しになっている場所、そこがいつも訓練をしている場所だ。

円形に近い形をしている。

その中心に立って、右手を握り締める。

魔石のついたブレスレットのしてある左手を右手に重ねる。
ぼわりと白い魔石が光る。

私の魔法は小夜を守るための魔法。

それ以外は要らない。小夜を守りたいから、私は力が欲しかった。革命軍に小夜を連れていかれて、ずっと近くでは守れない事を知った。少し離れた瞬間に、小夜が攻撃をされたら私は守る術を持たない。だから、どこにいてもどんなに離れていても、守れるように私が近くにいらなくても、小夜が笑っていられるように。

それが私の”自分だけの魔法”。

「…できた」

右手をゆつくりと開く。

一見すると白い小石にしか見えないだろう。
いっけん

それを地面に落とす。茶色い土に白が紛れる。

目の前の土が盛り上がる。

少し後退すれば、その土はどんどん大きくなって人の形となる。

あちこちで同じようにゴーレムが出来上がっていく。

ゴーレムが吠える。音の無い叫び声が始まりの合図。

種はまかれた

さあ、芽吹いて

炎を消して、水を凍らせて、風を途切れさせ、大地を埋め尽くせ
空を覆って光を無くしましょう

そうしたら、漆黒の闇がやってくる

闇を光から守れ

あなたは闇を守るために存在する茨なのだから

全てを吸収して自分のものとして、成長しなさい

そして真つ赤な薔薇を咲かせましょう

あの子を祝福するための薔薇を、あの子の孤独が埋まるように

さあ、芽吹け！

第四話 芽吹く（後書き）

だいが前から主人公の主流戦力となる”自分だけの魔法”は決まっていたのですが、やっと出せそうです。

勘が良い人は分かっってしまうんだろうな。∴分からないといいな！。

第五話 おやすみ よいゆめを（前書き）

ハウエル視点

第五話 おやすみ よいゆめを

リンが落とした1つの種から、茨が生まれる。

氷で出来たその茨は、増殖しながらゴーレムを倒していく。時になぎ倒し、時に突き刺しながら。茨の波がゴーレムを襲い、壊していく。

（なんとも、面倒な能力を作ったものなのう）

自分が作ったゴーレムが次々と壊されていくのにもかわらず、ハウエルは微笑んでいた。彼の眼にはゴーレムを通じて全てが見えている。凍てつく茨も、その傍らに全ての感情をそぎ落としかのよう^{たたず}に、無表情で佇むリンの姿も見えている。

（雪は氷に通じる。雪は死を運ぶ純白の死神。王国の人間は闇が死を運ぶと思っておるが、それは間違いじゃ。闇は眠りを守る者。自分で自分の首を絞めているのに気がつかないのは、なんとも哀れなことよのう。）

かつて仕えていた国を思う。遠い日の記憶だが、鮮明に思い出せる。そして×××に出会った日の事も。あの日、ハウエルの人生は変わった。

（リンはもう大丈夫じゃ。わしの力はいらない。）

「…のう、見ておるのじゃろう?」

なにもない空に向かってハウエルは呟く、その声に答えるかのように風がハウエルの頬を撫でた。

「あの子を、わしの唯一の愛弟子を、お主に託す」

最初から決まっていた事だ。あの子はこれから戦いの中に身を置く事になるだろう。

（3年…もう、3年になるのじゃのう。倒れているあの子達を見つけてから。なんとも早い事じゃ）

「あの子は強い。だが、同時に脆い。」

最後までリンは自分に弱音を吐いてくれなかった。涙を見せたのも、闇の神子^{サヨ}がいなくなったあの時だけ。笑顔といえは自分を責めるような、唇の端を上げるだけの軽薄な微笑みだけ。可愛げのない少女だった。女なのに男のような口調で話し、懐かない警戒心の強い猫のような娘。あの小さな体で、守るために強さを求めて言ったあの後ろ姿。体全体で拒絶をするかのように、前だけを睨みつけながら見据えている。あの氷の茨は、リンの心を表しているかのように見えた。

「おぬしは、終わりを見つけたと言った。わしはそれを信じる。」

だから、その終わりの向こうで…っ、…リンが心から笑えると…約束しろ！」

いつかあの子が正しい光の下で笑えるように。心からなんの愁いもなく素直に笑えるように。

最後の願いだ。

ふわりと暖かい風が吹いた。

その返事に安心して、体の力が抜けていく。瞼を開けていることもできなくなつて、ゆっくりと閉じた。 瞼を開けていること

『おやすみ、エリー。よい夢を』

遠くで誰かが呟いた。

風に乗せて祝福を送りましょう

愛しい者に愛を込めて

沢山の花を大地に咲かせましょう

悲しみなどなくなるように

荒廃した大地に雪を降らせましょう

怖いものが見えなくなるように

太陽は丸くあるべきだ

それが正しい姿だから

太陽が丸いから月も丸い

闇に形は無い

常に隣にあるものだから

おやすみおやすみ愛しい子

朝の来ない夜は無いけれど

夜の来ない日は無いけれど

溶けない雪は無いけど

私は永久を誓う

誓うよ 誓うから

おい
てい
か
な
い
で

第六話 冷たい手

氷の茨が、ゴーレムをなぎ倒していく。

鞭のように動いては吹き飛ばし、槍のように突き、土の人形は壊されていく。

成長し続ける茨をそつと撫でる。ひやりと冷たく、熱を奪っていく。触れても溶ける事のない茨は、氷と言うよりは結晶のようだ。鏡のように映る自分の顔に、思わず苦笑いが漏れる。

（酷い顔）

少し気が緩んだが、すぐに引き締め直し、周りを見渡した。

ゴーレムは壊されていく数と同じぐらい……いや、それよりも速いスピードで数を増やしていた。

ジャッジメント

（天罰は使えないか。そんなことしたら魔力切れしてこの茨も動かなくなる。）

茨はリンの意思を反映するが、ほとんど自動的に動いている。だから、茨を操作する必要はない。

氷の剣を作り、構える。

（やるか）

茨から離れ、ゴーレムを斬ろうとした……はずだった。

(…え?)

何もしていないのに、ゴーレムが崩れていく。

なにか奇襲でも来るのかと思ったが、なにも起こらない。ただ土の人形は崩れていくだけだった。そして最後の一体が崩れ…リンだけが残った。

(何事?)

ゴーレムの残骸が転がり、辺りを埋め尽くしている。警戒しながら触れてみたが、ただの土に戻っていた。

不測の事態に困惑していたが、ムクムクと怒りと苛立ちが成長していく。

ゴーレムを操っているハウエルに文句を言ってやろうと、リンは屋敷へと走っていった。

「じーじーいー、折角100体余裕で行けそうだったのに!なんで中断なんだよ!?!」

庭にはハウエルがまだロッキングチェアに座っていた。

朝に見た時はゆらりと揺れていたのに、今は揺れていない。寝ているのかと思い、顔を覗きこむ。軽く揺らしてみるのが起きない。

「…じじい?」

その暖かかったはずの手は、とても冷たかった。

第七話 師匠

木棺が、運び出される。数人の男が運んで行くのを、リンはただぼんやりと見つめていた。

これからあの木棺は…ハウエルは、遠くにある革命軍の墓地に埋められるらしい。この世界では土葬が一般的なんだと、本で読んだのを思い出した。

あつけない終わりだった。

木棺に納められたハウエルは思っていたよりも細くて、握った手は軽かった。沢山の花に埋もれながら微笑んでいるようにも見えたのは、リンのそうであってほしいという心が見せた幻なのだろうか。

「リン」

「…シャオエン」

起伏の無い声に振り向けば、黒い髪に赤い目、獣耳に揺れる尻尾…シャオエンが立っていた。

「ここはハウエルの死後、三日後に無くなるように出来ている。もうすぐ期限だ、離れるぞ。」

その言葉にリンは三年間暮らした屋敷を見上げる。書物や必要な物はもう運び出してある。

ぼんやりと屋敷を見つめ続けるリンに痺れを切らしたのか、シャオエンはリンを担いで走り出した。

「…なにすんだよ」
「もう飲み込まれる」

地鳴りが、リンの耳に響く。離れていく屋敷が、土に飲み込まれていくのが見えた。あのまま、あそこにいればリンも共に飲み込まれていただろう。

「あれは、じじいの魔法？」
「さあな」

そう言われたが、リンはたぶんじじいの魔法なのだと、心のどこかで確信していた。

飲み込まれて消えていく屋敷に、ハウエルが佇んでいるのが見えた。リンはハウエルに向かって手を伸ばす。そこにハウエルはいないと分かっている、届かないと分かっている、伸ばさずにはいられなかった。

（じじい）

伸ばした手は届かず、屋敷は消えていく。そして見えなくなった。伸ばした手は力を失い、シャオエンが走る振動に合わせて揺れる。

（じじい）

こんなにも別れはあつけない。
死別は永遠だ。もう二度と会える事は無い。

（…師匠）

一度も呼べなかった呼び名を、心の中で呟く。

それは虚しさと悲しさを呼ぶだけだった。

「泣いてるのか？」

シャオエンが言った。担いで走ってるため、シャオエンからはリンの顔は見えない。

「泣いてないよ」

リンは涙を流していなかった。だから、泣いていないという言葉は本当だった。

「そうか」

それっきり、シャオエンは何も言わなかった。リンも何も言わなかった。

風の章：プロローグ

綺麗な人だと、思った。

細長い四肢、ほどよく締まっっていて同性の私から見ても魅力的な身体。

サラサラと腰まである銀色の髪が風にゆれて、小さい頃、小夜と一緒に読んだ絵本に出てくるお姫様みたいだと思った。

だけど身に纏うのは綺麗なドレスじゃなくて、無骨な鎧。

その赤い唇から発せられる言葉は、力強く響き渡る。

黄緑色の瞳は自信と威厳に満ち溢れていて、笑みを浮かべながら前だけを見据えている。

人を惹きつけてやまない、付いて行きたいと思えるオーラがあった。

組織の頂点に立つためのカリスマ性があった。

その背に全てを背負って、率^{ひき}いる姿は凜々しくてとても眩しかった。

土煙が上がり、怒涛が響き、悲鳴があがり、血飛沫が飛び散る、暗い戦場の中。

あの人は革命の旗を掲げて不敵な笑みを浮かべる。

彼女がいる所に風は吹き、全てが動き出す。

銀色の髪をなびかせて、瞳に強い意志を乗せて、唇に笑みを浮かべながら、彼女は進む。

私はいつも、あの人の背中を見てた。

常に前にいて、追い越せない存在。それがなんだか悔しくて隣に立とうとしても、その背中では遠ざかる。そのくせ立ち止まれば、は

やく付いて来いと言わんばかりにあの人も立ち止まって一定の距離を保つ。

戦乙女。その言葉がぴったりだと思う。彼女は乙女なんて歳じゃないって笑ってた。

… ちょっと皮肉も込めたんだけど、この世界には戦乙女という言葉自体が無いみたい。

だから私は、常に前に行く彼女に意趣返しの意味を少し込めて、彼女を戦乙女と称える。

私にとって彼女は憎悪と羨望の対象で、追い越したいけど追い越したくない存在だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2796w/>

光が満ちるこの世界で

2011年11月30日18時53分発行